

男女共同参画社会について 推進委員からひとこと

男女共同参画とは男女が社会の対等な構成員として、政治的・経済的・社会的・文化的利益を均等に享受できる社会を目指すことと書いてありました。むずかしいことが書いてありますが要するに「男の人、女の人と別けず対等でやれる人がやればよいという社会」と、私の友達が話していました。

家庭にとっても昔は男の人はあまりキッチンには入らず女の人の場であったように感じられたが、今は早く帰って来た人が夕食にしても始めている時代。そして片付けにしても女の人だけでなく二人して楽しそうに洗っている。習い事の送迎も、パパの出番と心よく出かけてゆく。「昔はね私達がいそいで帰り送っていったよね。」と話していた。まわりをみても、少し前までとはちがいがでてきている。ゴミを集積所へはこぶ姿もだんだんと女の人から男の人へと変ってきている。これが一つの小さな男女共同参画ではないでしょうか。

男女共同参画推進委員 木村 幸子

女性に対する暴力をなくす運動
【11月12日～11月25日】

女性に対する暴力の予防と根絶に向けて、毎年11月12日～25日までの2週間、「女性に対する暴力をなくす運動」を実施し、配偶者からの暴力(DV)、性犯罪・性暴力、ストーカー行為、売買春、人身取引、セクシュアルハラスメント等を撲滅するための運動期間となっております。

町では、この期間中の11月14日(木)～11月18日(月)まで、埼玉県で実施しているパープルリボンキャンペーンに参加し、役場庁舎1階エントランスホールにタペストリーを展示し、ご来庁のたくさんの方々にパープルリボンをいれていただきました。



※タペストリーの飾り付けは、男女共同参画推進委員にご協力をいただきました。



パープルリボンには、
女性に対するあらゆる
暴力をなくしてい
こうとのメッセー
ジがこめられています。



事務局 吉見町自治財政課人権政策室
吉見町大字下細谷411
電話：0493-54-1515
FAX：0493-54-1535

企画・編集 吉見町男女共同参画推進委員会

令和6年度
通巻
第26号

ほほえみ

▶
人権
作文の
朗読



◀
人権
に関する
講演会



特集

- ・人権を考える町民のつどいレポート
- ・男女共同参画社会について 推進委員からひとこと
- ・女性に対する暴力をなくす運動

人権作文の朗読 人権に関する講演会

町内の各小・中学校の代表7名による人権作文

夢と絆

講師：^{はすいけ}蓮池 ^{かおる}薫氏

- 日時 令和7年2月8日(土)午後1時30分～午後3時50分
- 会場 吉見町民会館「フレサよしみ」大ホール
- 主催 吉見町・吉見町教育委員会
- 協力 吉見町男女共同参画推進委員会
- 協賛 埼玉県、川越・東松山人権啓発活動地域ネットワーク協議会

令和7年2月8日(土)吉見町民会館「フレサよしみ」で、お互いの人権を尊重しながら共に生きる社会を実現するため、人権を考える市民のつどいが開催されました。

当日は、町内の各小・中学校から選出された代表7名による人権作文の朗読と、新潟産業大学経済学部特任教授として活躍されている蓮池 薫さんをお迎えし人権に関する講演会が行われ、389人の方々にご来場いただきました。

人権作文の朗読では、それぞれの児童・生徒がみずからの体験談などについて、小中学生らしい感性をおりまぜながら堂々と発表され、とても心に響く朗読でした。

また、講演会では、蓮池さんが拉致の実態や北朝鮮での生活など当時の状況をお話しされ、帰国を果たしていない拉致被害者への思いを訴えられました。会場の皆さんの人権意識がさらに深まる講演会になりました。

来場者の感想

- 小中学生の朗読、どの子ども堂々とした発表ですばらしかったです。吉見町の子ども達が日頃から人権に対する自分なりの考えをしっかりともちながら、大人になって欲しいと思いました。
- 児童・生徒による人権作文とても良かったです。人を思いやる気持ち、前を向き進んでいく心が育まれていると感じました。
- 講演は、蓮池さんの生の声を聞くことができ、人権侵害の怖さ等感じました。このような講演を聴く機会が増えると良いと思います。
- 子供から大人まで人権について考える時間が持てました。大変有意義なことでありがたかったです。

このほかにも来場した皆さんから、たくさんの感想をいただきました。

人権作文の朗読

題名	学校名	学年	名前
差別でなく平等に	東第一小学校	6年	行徳 心優
お年寄りについて考えたこと	東第二小学校	6年	塚田 華梨
避難所での人権って？	南小学校	6年	関根 妃菜
車いす体けんをして	西小学校	4年	加藤 颯太
障害者とのかわりについて	北小学校	6年	矢嶋 悠斗
ピアノのレッスン	西が丘小学校	4年	石田みのり
自分らしさ	吉見中学校	2年	市川 天音



題名：自分らしさ

※吉見中学校の市川天音さんが朗読された人権作文です。

この作文は、さいたま地方法務局・埼玉県人権擁護委員連合会主催の令和6年度全国中学生人権作文コンテストにて奨励賞を受賞した原稿を掲載しています。



皆さん、はじめとは何だと思えますか？仲間外れ・暴力・暴言など様々なものがあると思います。これもいじめではありますが、いじめの定義になると少し違います。いじめとは相手に心理的又は物理的な影響を与える行為です。それによって相手が心身の苦痛を感じていたらそれはもう立派ないじめになります。

私は小四く小六にかけていじめを受けていました。最初はただのたわめやいじりだと思いい、気には止めていませんでした。ですが「カス」「ゴミ」「死ぬ」などの暴言を吐かれる度に自分の中の何かがすり減っているような感覚におそわれました。そして、その暴言は次第にエスカレートしていき、私が何かを触ると汚い、けがれるとバイキン扱いになりました。生きることを否定され、存在を否定され続けたのです。それぐらい別になんとも思わない、普通じゃないと思う人もいるかもしれません。それも一人一人の意見や思想と

考えると人間の素晴らしいところだと私は思います。ですが、小学生の私にとってはとても辛い出来事でした。先生はもちろん、家族に言うことも怖かった私の唯一の救いはインターネットでした。第五人格というゲームをよくやっていた私は仲の良いフレンドさんと話すことで少しでも自分の心が暗く落ちないようにしていました。それでも、毎日理不尽な言葉を投げかけられ続け、明るく笑顔を貼りに付けていた「私」はくずれ落ち、ならくのどん底まで、誰の救いもなく、ただ落ちるだけとなりました。それから僕は自分自身を隠すように一人称を変え、いつも元気な「僕」を作り続けました。心がポロポロになり、自傷行為に走ることで自分をやっと保てる、そんな状態だったのです。

でも、ある日先生に相談をしたのをきっかけに深く考えるようになったのです。いじめの原因が自分にあっただけ、無意識に自分がその人のことをいじめていて、それを相手も返していただけたのではと。いじめを受けている又は受けていた人全員が悪いと言いたい訳ではありませんが、自分の場合、原因が自分自身にあったのです。その事実さえ受け入れられなかった私は、自分が今、生きる価値を探し求めて動いていました。自分と同じ境遇におちいつている人、困っている人を少しでも助けられたら自分は生きていていいんじゃないかと、その考えを胸にいだいたまま、私は中学一年生になりました。どうせ新しい学年、クラスでも同じことが繰り返されるにちがいないと思っていた私ですが、その考えは間違っていることに中一の一学期で気づきました。新しい仲間はみんな温かく、とても優しい子ばかりだったのです。それはくずれ落ちた「私」の力持ちが戻っていく始まりのきっかけになりました。そんな日だまりのようみなさんに会っても、心の奥底ではいつ見捨てられるのか、暴言を吐かれるのかという不安でいっぱいでした。クラスや人が変わっ

ても心に刻まれた傷は消えてなくならないのです。たとえ三年、四年経とうが過去におきた出来事を変えることはできないのですから。私が伝えたいことはその傷をどうするかです。過去を振り返ることは確かに大切です。ですが、まだこの先何十年ある人生をそれだけに囚われて生きるのか、未来を信じて生きるのかです。今いじめが原因で自ら命を絶してしまう人が今でもいなくなりません。私はそんな人たちがいなくなるような世の中を作っていきたいです。みんながみんな違う「カタチ」を持っています。完璧な人、普通の人なんていません。だから私は自分のことを好きになって生きます。誰かが私になることはできませんし、私が誰かになることはできません。私は私です。なら、私自身が自分のことを理解してあげて生きていく方が人生を楽しめると思います。この先何があっても、私は自分と相手を大切に生きていきたいです。そして、いつかみんなが誰かを思いやり、その人自身の「カタチ」を大切にしてお互いを支えて生きていくような世界を未来につくって生きたいです。

